

静岡県地域史研究会報

— 静岡県地域史研究会 —

『家忠日記』の「御家門様」とは誰か

本多隆成

二〇一三年七月二日に行なわれた静岡県地域史研究会の例会において、筆者は「松平信康事件再論」と題して報告を行なった。その討論の冒頭で筆者が提起したのは、『家忠日記』の天正六年正月条にみられる「御家門様」とは誰かという問題であった。

これまでの研究ではもとより、ごく最近の著作においても、織田信長であることがいわば自明のこととして論述が行なわれてきた。たとえば、早くにこの問題を取りあげた平野明夫『徳川権力の形成と発展』（岩田書院、二〇〇六年）第二章第一節四や、拙稿「松平信康事件について」（『静岡県地域史研究』七号、二〇一七年）がそうであった。ごく最近では、黒田基樹『家康の正妻築山殿』（平凡社、二〇二二年）第五章や平山優『徳川家康と武田勝頼』幻冬舎、二〇一三年第五章までである。

ところが、この問題については、高橋陽介『『家忠日記』における「御家門様」の人物比定について』（『城』二二八号、二〇一九年）において、「御家門様」とは近衛前久であるとする新たな指摘が行なわれた。このような新説が出た場合は、それでもなお信長たというのであれば、この高橋説への批判が必要になるが、黒田・平山両氏の著書ではそれは行なわれていない。

両氏は天正五・六年に信長が岡崎城に來たとしてその叙述の中で重要な意味をもたせているのであるから、高橋説批判抜き的那种な叙述は研究史的にみると問題があるといわなければならない。

筆者は例会報告の段階ではこの「御家門様」を特定することができず、高橋説に問題があるとしても結論は保留としたのであった（『静岡県地域史研究会報』二五〇号、二〇一三年。例会報告要旨参照）。ところがその後、柴裕之氏のご教示により、津田宗及の日記の中に、信長のことを「御家門様」と呼んでいる事例があることを知った。そこであらためて、この問題についての結論を出すことにした。

まず、『家忠日記』（『増補史料大成』一九、臨川書店、一五七九年）により、関係史料を掲げよう。天正六年正月の条で「十六日、御家門様御成候とて、家康」「御越候」「廿一日、御家門様岡崎江」「御越候カ」「廿二日、御家門様」「」とある。なお、五月七日条については省略する。

高橋氏は天正四年（一五七〇）以降、羽柴秀吉は主人である信長について、「信長」「信長様」「上様」と呼んでいる。『家忠日記』でも天正六年十一月以降、同様の呼び方をしている。他方で、この時期「御

家門様」と呼ばれた人物としては、天正四年の『相良家文書』『島津家文書』に頻出するが、いずれも近衛前久であった。信長を「御家門様」と呼ぶ例は、天正四年以降に限らず、一例も確認することができない。こうして『家忠日記』での「御家門様」は、近衛前久であると結論したのである。

しかしながら、『信長公記』（角川書店、一九七〇年）によれば、天正六年正月十日に信長が鶴を朝廷に献上し喜ばれたとあり、近衛殿（前久）にも鶴を贈ったとしている。翌十一日に前久は御礼のため安土にやつて来て、十二日の松崎に帰洛したといっている。『近衛家譜』によれば、廿日には准三后宣下が行なわれている。とすれば、この時期前久は基本的に京都にいて、岡崎に下るようなことはなかったとみなければならぬ（『織豊期主要人物居所集』成『思文閣出版、二〇一一年、三六九頁）。

他方で、『信長公記』によつて信長の動静をみると正月十三日尾州清洲で鷹狩りのため、この日は相原、十四日岐阜、翌日逗留、十六日清洲下着、十八日三州吉良へ、鷹狩りで獲物多し、廿二日尾州、廿三日岐阜、次日滞留、廿五日安土帰城とある。この日程からすれば、廿一日に信長が岡崎城に立ち寄ることは可能である。それならば、太田牛一はなぜ「廿一日岡崎」と書かなかったのかという疑問は残るが、『家忠日記』で廿一日に岡崎にやつて来た「御家門様」は信長であった可能性が高くなる。問題は、この時期、信長が「御家門様」と呼ばれることがあったのかどうかという

ことになる。『宗及茶湯日記他會記』（『茶道古典全集』第七卷、淡光新社、一九五九年）によれば、天正六年正月十一日条で安土へ御礼に行った宗及は御殿を残らず見ただけではなく、「御茶番様、直二御説被成てんしゆ（天守）をはしめ方々拝見申候といつている。また正月晦日条では、「從 御茶番様御拝領之御絵也」ともある。まさに天正六年正月時点で、宗及は信長のことを「御茶番様」といつているので、信長がこの時期「御茶番様」と呼ばれることはあつたとみてよいだろう。そうなる『家忠日記』で正月廿一日に岡崎へやつて来たという「御茶番様」は前々ではなく、信長であつたことが確かとなり高橋説は成り立たなくなつたといえよう。

例会全要旨

二月例会三島市築春園内郷土資料館
二月十七日（土）十名参加

※書評者の報告要旨と合わせて厚地氏のコメントを掲載します。

【要旨】『近世後期宿駅運営と幕府代官—東海道三島宿改革仕法を中心に—』（岩田書院、二〇一三年一〇月） 厚地淳司

第一編では、三島宿改革仕法の全体像について明らかにした上で、幕府の交通政策の基調や三島宿の財政難といった改革仕法の背景前提、そして立案から準備を経て、幕府道中奉行所へ勘定所による宿方人馬役負担の削減提示に至る過程を確認した。

第二章では、三島宿改革仕法の概要に関して、まず第一に、『島市誌』・静岡県史』

における基本的な事実関係の認識に対する修正点を指摘した。具体的には天保一二年提出とされた「助郷敷願書」が、文政一二年であること等をあげた。第二に、改革仕法全容を示す史料として弘化四年「請書」を提示した。第三に、三島宿改革仕法が、①宿方人馬役削減、②宿方運営改革の二本柱からなることを明らかにした。

第二章では、三島宿改革仕法が文政宿駅改革の延長線上にあり、幕府交通政策へ宿駅維持策の一環として位置づけられることを確認した。

第三章では、文政一二年（一八二〇）に発生した三島宿の助郷方と宿方との出入を取り上げ、吟味内容から、後の天保八年の改革仕法における宿方人足役削減の方向性が、文政一二年段階には幕府内部で模索されていたことを明らかにした。

第四章では、天保期における三島宿の財政問題の本質が、拝借金五八八両余等の巨額の負債のうち、改革仕法実施の契機となつたのは、天保六年に蕪山代官江川英龍が勘定所へ返済繰り延べを依頼した拝借金三〇〇〇両余の返済問題であることを明らかにした。

第五章では、評定所留役金井伊大夫らの東海道・中山道調査をはじめとする天保六年の幕府・蕪山代官等の動きを出発点として、翌七年にかけて、三島宿改革仕法の立案、実施のための準備が進められていく過程を概観した。

第六章では、天保八年四月二日に幕府道中奉行所へ勘定所によって提示された宿

方人馬役負担軽減に関する内容の基本的な内容を、この時に関係宿村より提出された「請書」より確認した。

第一編では、宿方人馬役軽減とともに、改革仕法の二本柱を構成する「宿方運営改革の立案実施について」、特に渡邊金璋の三島宿取締役としての活動を中心に取り上げた。

第一章では、天保八年四月に渡邊金璋が三島宿取締役に就任するまでの過程を論じた。

第二章では、三島宿の人馬継立帳簿、および財政関係（特に割増貫銭帳簿の作成上の問題点）を取り上げた。

第三章では、宿方運営改革の骨格となつた人馬継立に関する二四種類の帳簿の再整備と、主法書・帳について取り上げた。

第四章では、宿方運営改革の実施過程における、取締役としての渡邊金璋の活動を、確認し、宿方運営改革は、少なくとも開始から数か月間は順調な進捗状況であつたことを明らかにした。そして、天保九年七月、支配替えにより、江川英龍は蒲原宿支配を離れると、渡邊金璋は、同月に蒲原宿問屋、同年一月に三島宿取締役を退任したことを明らかにした。

第三編では、三島宿改革仕法が周辺地域へ及ぼした影響について振り返る。このことを通じて、文政宿駅改革以来の幕府交通政策が、宿駅周辺地域への転嫁を通じて宿駅負担を軽減する方向性であつたことを再確認し、文政宿駅改革以来の幕府交通政策の展開における「負の側面」を明らかにする

ものでもある。

第一章では、改革仕法が周辺地域に及ぼした影響として、天保八年四月に提示された三島宿方人馬役負担の軽減策のうち、川原ヶ谷村・五ヶ新田といった東海道箱根西坂沿道諸村の三島宿加宿化とその影響について明らかにした。

第二章では、天保八年の改革仕法的内容的な限界や制度的な矛盾の現れとしての天保八年九月に発生した三島宿宿方と定助郷村々との出入を取り上げた。

第三章では、天保九年二月における幕府による伊豆南部の加助郷設定とこれに対する加助郷対象の村々の抵抗について取り上げた。加助郷設定から、加助郷設定は、前章の三島宿定助郷と宿方との出入の熟談・内済と同時に進んでいたこと、改革仕法の矛盾、改革仕法に対する助郷の抵抗、抵抗に対する幕府の弥縫策とを繰り返す混乱の連鎖を確認した。

【書評者の報告要旨】

第一編 天保八年東海道三島宿改革仕法の概要と前提 平林研治

本書第一編では、天保八年に施行された三島宿改革仕法の概要と改革に至る経緯さらに蕪山代官やその手代らの動向を明らかにしている。

三島宿では東海道の通常の宿駅が百人百足の伝馬役を課されているなかで、二百人百足という過大な負担を課されており、この過剰人足百人分の取扱いが改革の焦点となつている。

まず、基本的事項の確認として、改革仕

法の施行が天保八年であること、改革の主たる内容である伝馬役の負担軽減が人足役百人分であること、改革の大きな狙いが拝借金累積により悪化した宿財政の再建にあること等を明確化している。その上で、幕府が過勤人足百人分を宿から助郷へ転嫁するまでの経過を追い、幕府の文政宿駅改革と連動したものであることを明らかにしている。

とくに、『三島市誌』では天保十一年とされている宿・助郷出入りについて、これが文政十一年に起こったものであることは土屋寿山氏によつて指摘されていたが、これを改めて確認し、さらに幕府がはじめ過勤人足を助郷へ転嫁しようという姿勢を見せたものであるとして、三島宿の改革における位置づけを行っている点は本書の重要な成果の一つである。

また、蕪山代官手代、中村清人の動向や代官江川英龍の幕府勘定所への拝借金年延歟願等の分析により、代官が三島宿の財政悪化に危機感を持ち、改革に大きく関与していたことを指摘している。

発表者からは、拝借金の内容に災害関連のものが多いため、宿財政悪化の要因として伝馬役負担だけでなく災害についても考慮する必要があるのではないかという点、代官の宿駅改革への関与について江川代官が土豪代官であることや英龍個人の改革派としての力量をどう評価すればよいのかといった点を質問した。この中で、後者については土豪代官として地域の事情に精通し、郷農閥層との結びつきのあ

点や英龍個人の力量は重要だが、一方で中泉代官も類似する改革を進めており、他の代官も同じようなことを考えていたのではないか、このあたりの事情を調査することは今後の課題となるとの回答をいただいた。

最後に、発表者は三島市職員であるため、厚地氏には三島市郷土資料館所蔵資料を利用して三島宿についての研究を進めていただいたことについて感謝をお伝えしたい。

第二編 三島宿取締役渡邊金璋の宿方運営改革

三宅真人

第一編では、蒲原宿問屋・渡邊金璋の三島宿取締役としての活動から、金璋を任命した蕪山代官・江川英龍の宿財政再建に対する主体的関与が明らかにされている。本編を通して宿財政再建策の不可欠な前提として、蕪山代官・手代・郷農閥層の連携があつたことや、幕府方針（宿方人足役削減の実効性を担保する要素として宿方運営改革が存在していたことなどが示された。幕府の交通政策を考えるうえで、現地での実務執行者レベルに踏み込んだ具体的検討が行われたことの意義は大きいといえる。また、宿取締役という幕領の宿場における中間支配機構を考えるうえでも当該研究は重要である。加えて、蒲原宿問屋・渡邊金璋とその事績を著した貴重な資料の存在が広く紹介されたことも意義深い。

以下、雑感・疑問点等を述べる。まず、蕪山代官江川氏と渡邊金璋の結びつきに

ついてである。厚地氏は、江川英龍が金璋の三島宿取締役就任を促すにあたって、自宿に留まらないう「広域的な利害の論理」を持ち出しているとした。これは、江川氏が地域の有力層を権力に取り込む論理として頻繁に用いられたものだといえる。金璋の父・周球が蒲原宿問屋に取り立てられた際にも、地域社会に対する「公共性」が強調されたことを厚地氏は明らかにしている。

（厚地二〇一八）渡邊家や金璋がこうした公共性を受容する素地はどこにあるのだろうか。山崎善弘は、巨大郷農層が地域的公共性の担い手となることについて、経営の発展や中下層農民との軋轢回避といった私的利益の追求が根本にあるとしている。（山崎二〇一七）金璋の場合、取締役受諾により得られる利益とは何だろうか。手掛かりとなる事例として、取締役就任と時期を同じくして金璋が蒲原宿の助郷代伝馬の設定を代官経由で勘定奉行に願っていることが挙げられる。（『生涯略記巻七』）三島宿取締役への就任により、自宿の負担軽減にかかる作業がスムーズとなった可能性のあるのではないか。また、公共性の受容を考えるうえでは金璋の思想や学問、交流などに注目することも必要であると思われる。

続いて、改革仕法に対する三島宿の反応について考えたい。厚地氏が分析に用いた『神原経歴誌』『生涯略記』はいずれも金璋自身が後になって編集した資料である。そのため、金璋により立案された仕法が実際に三島宿の人々にどう受けとられたか

掴みにくい。四章で引用された天保八年十一月の金璋による「口上書」からは三島宿での取調に立ち会う者がいないことや、金璋が提案する「散し賄」への反対意見が宿内にあることが窺える。改革仕法は必ずしも順調に進んだとはいえないのではない。また、運営改革における宿役人の人事刷新として登用された年寄格・唯助の存在について注目したい。その存在基盤や実務上の成果について検討を行うことは、改革仕法の実態を探るうえで有効だろうか。金璋の取締役退役の前後で、唯助の宿内での立場がどう変化したのかも興味深いと感じた。

今回書評を行ったことで、幕領代官支配や近世交通政策、幅広い知見を得ることができた。機会をいただけたことに感謝したい。

三編 天保八年三島宿改革仕法の影響

掛川市 学芸員 南 隆彦

本節では、三編の構成を簡単に内容を紹介し、本書における意義を示したい。そして最後に評者の視点から若干の考察を行い、拙いながらも本書をより深めることを試みたい。

本編の構成は、以下の通りとなっている。

- 三篇 天保八年三島宿改革仕法の影響
- 第一章 東海通箱根西坂村々の三島宿加宿化
- 第二章 天保8～9年の三島宿助郷出入
- 第三章 天保9年の伊豆南部への加助郷設定とその背景

終章 三島宿改革仕法と幕府代官の宿駅支配

第三編において、著者は文政の宿駅改革の展開における「負の側面」を明らかにしようとするものと述べている。

以下、簡単に内容をみていく。第一章では、天保八年の三島宿改革仕法として関連する定助郷・増助郷・加助郷の新たな諸負担のなかでも従来無役の五ヶ新田の加宿化について、箱根八里の公用通行支える制度とはかけ離れた実態であったこと、これらの村々を三島宿加宿とすることで人馬役負担に上限を設定し、人馬制度と市場を介した人馬確保の乖離を解消するものであったとした。

第二章では、天保八年九月に発生した三島宿方と定助郷村々との出入を取り上げ、定助郷村々による抵抗を排除した幕府側の「片押」にみられる強硬姿勢を評価しながらも、伊豆南部における広範な訴訟活動の原因ともみた。

第三章では、前章の定助郷村々との出入を契機として訴訟活動が伊豆全体に広域化した背景を考察し、三島宿拝借金返済に一定の効果があつたとしながらも、人馬継立により生じた矛盾を定助郷村々から伊豆南部村々へ転嫁する幕府の綱渡り的な弥縫策とした。

終章では、幕府の宿駅維持政策における幕府代官・手代・取続役の具体的な動きを明らかにしている。江川家の「河津寛」という利益供与の存在と代官・手代・豪農商層の取続役（年寄格）という英龍の支

配機構の一端を指摘した。

本書の意義として、まず個別実証研究として一つの宿駅改革を担い手レベルにまで踏み込んだ研究成果といえる。近年の宿駅研究の少なさをのなかでは言うまでもないことであるが、それを除いても諸改革の研究のなかで支配側の詳細な意図と、それに対する民衆側の反発や捉え返しの動向、取締役の金繰りといった主体にまで踏み込めた点に重要さが際立つ。また、「東海道宿」研究としても、代表的な先行研究は三河方面や関東周辺の宿場に集中し、やや偏っているともいえるなかで三島宿を起点として周辺地域を取り上げた研究書は駿・中東遠地域史研究のなかで指標的な役割をもつていくであろう。

最後に、評者の拙い理解のなかで若干の考察を試みたい。一つは幕藩体制の動揺として論じられた助郷負担や宿財政難という交通制度の問題を評定所留役金井伊大夫が「片押」と示されるほどの強硬姿勢の幕府の力量としての評価は、一方でその後これを契機として伊豆南部にまで広範囲に巻き込んだ訴訟として幕末へ向かう状況の評価と合わせてどう考えるのか。さらに本書での成果は、幕末から明治期に入つた助郷問題のなかでどう関連しているのか。例えば、明治年の宿・助郷組替による上総国長柄郡一五〇ヶ村の附属助郷化や、そのなかで生ずる新助郷諸村と旧助郷諸村に駅費問題など、本書でみられた東海道宿の助郷負担が伊豆全体にまで転嫁されていく詳細な宿駅政策の動向は、幕末

の助郷負担による地域の困窮や頻発する争論、明治初期の「宿・助郷一体」の公用継立による広域化する交通負担の転嫁といった、近世の近代の交通政策研究のどこに・どのように位置付けるのか考えなければならぬはずであろう。

本書には続きがある、そういった展望を抱けるものであると評者は思考した。

【例会案内】

☆ 五月例会

一、日時 五月二十五日(土)

午後三時

二、会場

静岡市歴史博物館講座室(入場無料)

三、報告者及び報告名

「駿河の戦国地域社会からみた今川氏」

廣田浩治氏(静岡市歴史博物館)

館

【事務局より】

一、五月例会報告について

ご承知の通り、静岡市歴史博物館では、四月二十七日より、六月九日まで企画展「今

川義元・偉大なる駿河の太守」が行われています。廣田

報告はそれに伴うものなので、ぜひ企画展と合わせてご

参加ください。

なお、六月・七月・一〇月

まで報告者は決まっております。

報告希望の方は十一月以降になりますのでご承知おき

ください。

二、寄贈図書を紹介

以前例会で報告いただいた朝比奈新氏は、現在立教大学講師をされています。博士論文を『莊園制的領域支配と中世村落』(吉川弘文館、二〇一四年一月)としてまとめられ、当館に寄贈いただきましたので紹介申し上げます。

なお、静岡県富士山世界遺産センターからも『富士山と日本人』(館長遠山敦子氏編著、『富士山学』第四号をいただきました。

三、今回の会報は、報告要旨の分量が多かつたため、三月例会の報告要旨は次号に掲載します。また、行間・字間が詰まったものになってしまいました。ご了承ください。

静岡県地域史研究会報

第254号

2024年5月5日発行

静岡県地域史研究会

会長 小和田哲男

事務局長 森田香司(090)7023-0733

会計担当 北村 啓(090)4230-6530

〔会費納入先〕

北村啓気付

郵便振替口座 00880-3-63062

年会費 4000円(次年度より 3000円)

